

<同志社人が誇りに思える情報>

同志社ファン・レポート

Doshisha fan report Doshisha fan report Doshisha fan report Doshisha fan report Doshisha fan report Doshisha fan report

発信：同志社ファンを増やす会

第305号 ・2021年04月15日発信

『同志社の自由主義』(2)新島襄の自由

野本真也先生

(学校法人同志社元理事長、日本キリスト教団賀茂教会牧師)

■はじめに (編集人より)

4月1日で同志社ファンを増やす会は8回目の新年度を迎え、原点を見直そうと野本真也先生に<同志社人が誇りにすべきこと>をお伺いしますと「それは同志社の自由教育でしょう」と「奨励・同志社の自由主義」のご提供と利用の承諾をいただきました。

内容は聖書やキリスト教のことが出てきますが、これを避けていたのでは、いつまでも同志社や新島襄の核心に迫れない、と考えました。

そこで全文を5回に分け、聖句やキリスト教は、元牧師の有賀誠一先生(同志社大学卒、理学博士)に解説を「同志社ファン ZOOM 講座」でお願いしております。また、用語については、文末に参考情報を添え、講座でも口頭説明します。このようにレポートは講座とセットになっています。

②. 新島襄の自由

(前号の) それらの歴史は皆さんに自分で学んでいただくとして、今は何よりもまず、同志社の自由主義の原点ともいべき新島襄の「自由」についての理解と、その理解の基盤となっている聖書の「自由」そのものの理解について、ご一緒に確認しておきたいと思うのです。

新島は1862年11月、快風丸に乗船して江戸から玉島へ向かうのですが、その航海のなかで新島は初めて自由を経験し、自由への強い欲求をもつようになり、やがてそれが脱国の動機の一つとなったことはご存じでしょう。

また新島が、アメリカのニュー・イングランド地方へ自由を求めてやってきたピューリタンの伝統をもつ多くのキリスト者に出会ったこと、そしてアンドーヴァー神学校で、人間の

自由を内面的意志の自由として人格の中核に位置づけ、道徳的責任の主体として本質的なものとするニュー・イングランド神学を学んだことも見逃すことはできません。

その新島が同志社英学校を設立し、目指した教育は「自由教育」だったのです。新島は永眠する少し前、1889年11月ですが、教え子の横田安止と広津友信に宛てて手紙を書いています。そしてそのなかで、「小生畢生の目的は、自由教育、自治教会、両者併行、国家萬歳」と記しているのです。教え子の大久保真次郎に宛てても、何月何日かまでは分からないのですが、同じ年に書いているのです。

では、この「自由教育」とはどのようなものだったのでしょうか。卒業生の一人、露無文治という牧師によれば、新島の「自由教育とは人が神より賦与せられたる智情意(と)良(き)宗教性を何等束縛制圧歪曲することなく、自由に円満に開發涵養するをいふ」のです(露無文治「自由教育自治教会」『新島先生記念集』79頁)。また、同志社の教授法は「ドコまでも啓発自習主義で、教師が教へるといふよりも、寧ろ生徒が自ら学ぶといふこと、即ち生徒自らが指定せられた学課を準備して教室に出で、教師の前に其準備した学課を復習することであった」とも述べています(露無文治「思い出多き同志社生活」『創設期の同志社』4頁)。

また新島の遺言の第2項に、「同志社教育の目的は其の神学政治文学科学等に従事するニ係らず皆精神力あり『真誠の自由ヲ愛し』以て邦家ニ尽す可き人物を養成するを務む可き事」(『新島襄全集4』403頁)とありますが、この「真誠の自由ヲ愛し」という文言は、原本をみると、欄外に書き足されていることが分かります。1890年、新島が亡くなる二日前の1月21日の午前5時30分、徳富が筆記を始めました。そして、徳富が筆記したものを朗読すると、新島は、一つひとつうなずきながら聞き、第2項のところへくると、「真誠の自由ヲ愛し」が抜けていると、新島が指摘したのだそうです。それで、徳富はこれを欄外に書き加えたのですが、そのとき、新島は嘆くように、こう言ったというのです。「世に真正(ママ)の自由を愛するもの鮮(すくな)し、否な我黨の人士に於てすら全く此の眞味を解し得たるもの多からず、豈に嘆ぜざる可けん哉と」(『新島先生言行録』徳富猪一郎序文・小崎弘道校閲・石塚正治編纂 警醒社書店 明治24年 84頁)。

このように、新島は「真誠の自由」を大切にしましたが、自由が「真誠の自由」でなくなるのは、どういう場合でしょうか。新島は「自由ヲ得ルモ又之ヲ我(が)儘ニ用ユルノ憂(え)アリ」と、ある演説のなかで述べています(『新島襄全集1』431頁)。自由が我が儘として用いられる場合、その自由は真誠の自由ではなくなり、虚偽の自由になってしまうのです。(つづく)

補足情報

担当：多田 直彦

【快風丸】

安中藩の自家筋に当たる備中松山藩がアメリカから購入した船。それを浦賀から玉島までの往復で試運転するとき、備中松山藩主・板倉勝静の許可を得て新島は乗船した。その時の記録が『新島襄自伝』74頁から81頁に「玉島兵庫紀行」として記載されている。

新島はその翌年（1864年）偶然、快風丸に乗って函館に行っている。その辺りの事情と日記が『新島襄自伝』82頁から101頁にある。

【ニューイングランド神学】

[英語]New England Theology. ジョナサン・エドワーズ（1703—58年）に起源を持つ神学的伝統に付けられた名である。詳細はWeb上で、説明がある。その出典は、『新キリスト教辞典』いのちのことば社, 1991 とのこと。 <https://www.wordoflife.jp/bible-834/>

【露無文治】

（つゆむ ぶんじ、慶応2年2月18日（1866年4月3日） - 昭和16年（1941年）2月22日）は日本組合基督教会の牧師である。1866年（慶応2年）備中国倉敷天城に久次郎、せん子の子として生まれる。1882年（明治15年）岡山市に出て原泉学舎で漢学を学び、オテイス・ケリーや金森通倫によりキリスト教に接する。

<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E9%9C%B2%E7%84%A1%E6%96%87%E6%B2%BB>

新聞で新島襄の経歴を読んで渡米することを志すが、天城教会の亀山昇から同志社に行くように勧められ、同志社英学校に入学した。在学中に、京都第二公会（現・日本基督教団同志社教会）でアメリカンボードのJ・D・デイヴィスから洗礼を受ける。

在学中、同志社英学校で開催された第1回夏季学校の記録を編集して、『学生之大会』を刊行する。また、在学中に新島が死去する。新島の死に非常なショックを受け、「八日間の出来事」として書き残している。在学中に、牧野虎次、山室軍平と共に「祈りのバンド」というグループを結成する。

1891年（明治23年）に同志社神学校を卒業して、姫路教会（現・日本基督教団姫路和光教会）に主任伝道師として赴任する。1895年（明治28年）に高松教会に転任し、1896年（明治29年）に今治教会（現・日本基督教団今治教会）の牧師に就任する。

この他に、本井康博著『新島襄の教え子たち（出身地別）』に詳細な記述がある。

【ある演説】 愛人論の一部である（『新島襄全集1』431頁下段）

自由ヲ得ルモ又之ヲ我儘ニ用ユルノ憂アリ、人民ハ政府ニ向我儘ヲ申立、子供ハ親ニ向我儘ヲ申立、妻ハ夫ニ向我儘ヲ申立、貴重ノ民権ヲ下シテ下等ノ我儘ト混スルノ憂アレハ、国ノ幸福期シ難〔ク〕、我儘起リ国家ノ滅亡ノ基礎トナルヲモ計リ難シ

なお、愛人論の全文と解説は『新島襄教育宗教論集』p.290からにある。